

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 15 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008 ～ 2011

課題番号：20520264

研究課題名（和文）

ホーソン文学における歴史と詩学の位相——独立期アメリカの精神と文化の表象を読む

研究課題名（英文）

History and Poetry in the Works of Nathaniel Hawthorne

研究代表者

入子 文子 (IRIKO FUMIKO)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：80151695

研究成果の概要（和文）：ホーソン研究において従来盲点であった、アメリカ独立期をめぐる政治・社会の公的テーマに絞り、詩的想像力という伝統的な詩学のテーマを散文において考察する総合的研究を目指した。本研究は学際的研究でもある。アメリカ文学はとかくアメリカだけを切り離してローカルに見る見方に偏るが、ホーソンのテキストは明らかにアメリカが接触した先住民やヨーロッパなど、他の文化への理解をも促すからである。関連する表象を扱う際には、私のこれまでの図像学的研究方法を継承した。

研究成果の概要（英文）：This study focuses mainly on the discussion of public themes, political and social, related to the period of American Independence. These themes having been left unnoticed and unstudied and therefore have remained as a blind spot in the general perspective of the study of Hawthorne's literary works. This study can be characterized as a proposal of making synthetic approach to the poetic imagination, an approach traditional in the literary study of poetry, or to poetic themes included in his prose works, and therefore this is going to be an interdisciplinary approach to Hawthorne's prose works. The interdisciplinary nature of this study is, while the study of "American literature" tends to study America locally, as independent of the rest of the world, to pay attention to the former inhabitants in the American continent and European cultures the author himself had made contact with in his life, and therefore help us to understand other kinds of cultures than those limited to Hawthorne's time. In discussing the symbols, emblems and icons, related to my discussion of Hawthorne's works, I am further going to continue utilizing such iconographical methods as I have hitherto employed in my own study of Hawthorne.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：米文学（ホーソン、トランス・アトランティシズム、独立期アメリカ、フレンチ・インディアン戦争、ジョージ・ワシントン、ジェイムズ・ウルフ、歴史と詩学、図像）、

1. 研究開始当初の背景

本研究は、以下(1)(2)に示すように、平成11年度以来、申請者が取得した科研費による、19世紀アメリカのナサニエル・ホーソーンの文学研究成果と、本務校である関西大学の、工学部主導の文科省大型プロジェクトでの文化の研究成果を合体させて、本研究の申請者による一応の総まとめと位置づけるものである。(因みにその間、科研費助成金審査員を3年務めた。)

(1) 科学研究費助成金研究代表者として：基盤研究(c)(2)平成11-13年度『緋文字』と17世紀英国文化の表象」、基盤研究(c)(2)平成14-16年度「ホーソーンの<ロマンス>における文学のテキストと歴史のコンテキスト」、基盤研究(c)(2)平成17-19年度「19世紀ニューイングランド文学へのヨーロッパ文化の波及と効果——ホーソーンの<ロマンス>におけるその軌跡」がある。

研究分担者として：

基盤研究(b)(2)平成12-14年度「英米文学における中世・ルネッサンスのイコノロジーの影響と役割」(研究代表者 藤田実)がある。

(2) 科学研究費以外の研究分担者として参加した、文部省私立大学学術フロンティア推進事業補助金、平成9-13年度「高度環境共生都市システムの構築」(研究代表者 和田安彦)における独立期ワシントンDCの都市計画に関する研究がある。

上記(1)(2)のいずれにおいても常に、従来の先行研究がとかく陥り勝ちだった、アメリカのみに視点を置くローカルな視点を避け、ヨーロッパ・ルネッサンスを中心に古代・中世にまで視野を広げる、トランス・アトランティックな考察を貫いてきた。

研究成果の一つである『ホーソン・《緋文字》・タペストリー』(南雲堂2004)では、19世紀アメリカのホーソーンの<ロマンス>を、古代にまで遡るイギリス及びヨーロッパ・ルネッサンスの学問・芸術の伝統の中に置き、<もの>と<意味>を重ねる表象研究を軸に、中世以来のヨーロッパの中心を成したハプスブルクの<Union>の概念のもと、ヨーロッパを現在のアメリカに繋ぐものとして考察した。その際、申請者は、ホーソーンの想像力の源にロバート・バートンの『憂鬱の解剖』(1621)が深く流れ込み、作品の随所に通相低音として響いていることを発見し、常に言及した。

一方、文学研究とは別の角度から、共生都市に関する工学部主導の大型プロジェクトにおいて、建築形態としての合衆国<ペンタゴン>の正五角形の形態の謎を追った研究成果『アメリカの理想都市』(関大出版部

2006)がある。独立期ワシントンDCの都市計画や五角形の要塞という公的構築物に込められた<意味>を、ヨーロッパ・ルネッサンスを中心とした学問・芸術の中で読み解き、ヨーロッパの過去とアメリカの現在さらには日本を、文化的に結合する道を開いた。この学際的研究は、独立期アメリカと古代・中世・ルネッサンスのヨーロッパを一つに繋ぐ発想として、本研究の目指す方向の素地を形成した。本研究は独立戦争における植民地アメリカの覇権争いにヨーロッパ諸国の覇権争いを重ね、文学的想像力の表象を通して、歴史を断片化してゆくホーソーンのテキストを読む試みであるからだ。

さらに、本研究申請時には、アメリカ古典文学に独立の時代を読むとの主旨で司会・講師を務めた2006年度日本アメリカ文学界関西支部記念フォーラム「起源の感覚」を発展させ、共編著『独立の時代——アメリカの古典文学は語る』(世界思想社2009)の出版の企画が進行中であった。独立期に焦点をあてた本研究はその延長線上にもあった。

2. 研究の目的

2005年、アメリカの社会派作家ロバート・モーガンによれば、9.11同時多発テロ、イラク戦争以後、アメリカ国民の多くは「道徳的判断の曖昧な時代に生きていて」、「何が正しく、何が道徳的なのかわからなくなっている」。この<揺らぐアイデンティティの拠り所>として、生き方の規範をアメリカ国家直接の原点たる独立期の指導者達のあり方に求めようとし、そのため歴史書における大衆人気も19世紀半ばの南北戦争から18世紀末のアメリカ独立戦争を含む独立期アメリカへと移ってきた、と。

このアメリカ社会の思想の状況を鑑みると、アメリカ文学の独立に寄与したホーソーンの詩的想像力のあり方はますます重要性を帯びてきたと思われる。ホーソンが独立戦争を中心とする独立期アメリカに容易ならぬ関心を寄せていたことは、象徴的思考の強い彼がアメリカ独立記念日7月4日に、また父親が独立宣言の年1776年に誕生した事実を照らせば、想像に難くない。実際ホーソンは、J・スパークスの編になるジョージ・ワシントンの12巻に上る膨大な数の書簡や公的記録、関連書に目を通していった。さらにスケッチ、エッセイ、児童向け歴史、短篇、ロマンス、晩年未完の長編などに、独立戦争を中心とする公的テーマの表象をジャンル横断的に登場させ、関心を深めていったことを示している。

しかし不思議なことに、その時点ではアメリカにおけるホーソン研究でこれをテーマとする総合的批評は見当たらなかった。そこで初期ピューリタン社会以外にホーソ

ンがテキストに甦らせたアメリカのもう一つの過去として、独立期アメリカを取り上げるのも意義あることではないかと考えた。

特に独立期を背景にする晩年の未完の断片的長編や、歴史の断片を連ねるカタログ手法によるスケッチやエッセイが、批評の俎上に上ることは稀である。これらの作品では、<鐘>、<要塞>、<衣装>、<墓>など、戦争や独立の精神の表象が用いられる。しかし、表象を通して全てが一つの主題に収斂して行くのではなく、先住民族やヨーロッパ諸国を含め、さまざまな立場から眺めた珍しいエピソードや歴史の断片が、途切れることなく行列を成して現れる。一定の概念や考え方の表出を期待して読み始める読者は、この一見無秩序な歴史記述を前にして途方に暮れ、ホーソンの思考の流れを読みとることを断念する。そこでアルフレッド・ウィーバのように旅行記の一環として、またはトマス・ムアのように知識層と大衆という異質な読者層を二つながらに獲得するためのホーソンの「レトリック」として読むのが現状である。

しかし、仮にも国家の運命に関わる由々しき公的テーマを扱いながら、ホーソンにあっては、戦場は詩情を育む場とも考える。このホーソンの文学者としての個性的想像力のあり方をどう理解するのか。本研究はこの難問の解決に向けて、表象の図像学的解釈を盛り込み、芸術としてのホーソン文学が持つ、詩的精神や審美性、詩的想像力と詩的レトリックという伝統的詩学の視点を従来の新歴史主義的視点に融合し、<新しい詩学>として把握する。

本研究は批評の昨今の動きとも連動する。新歴史主義は我が国の内外に著しいイデオロギー批評を生み出した。しかしミレニウムを機に、グリーンブラットやサイド、イーグルトンなど、文学研究での新歴史主義の旗手達は、古典や美の価値、文学の伝統、詩学の重要性、個人主義、作者の復活などを主張して、一見昔の研究法に逆戻りしたかの主張を前面に押し出している。自ら路線修正を宣言し、行き過ぎた新歴史主義の文学研究を支配して、自ら歯止めをかけた。本研究申請時においては、この新たな動きがシェイクスピア批評を中心に活発になりつつあった海外の研究に対して、国内のアメリカ文学研究では反応が鈍かった。本研究は新たな方向へとホーソン研究を活性化する一つの企てとして始められた。

3. 研究の方法

(1) ホーソンの文学テキストに現れた独立期アメリカの精神と文化の表象を、表象研究をさらに進展させた視点——新歴史主義的視点とホーソン文学が持つ伝統的詩学

の視点を融合させた視点——で読む。特に戦争という公的テーマに作家の詩的想像力を混ぜ合わせながら歴史の断片を連ねてゆく、批評の俎上に上りにくいスケッチやエッセイというジャンルに光をあてた。

(2) 史料の入手：

まず独立期アメリカの歴史理解に不可欠な資料であるジョージ・ワシントンの書簡集や日記、その時期のアメリカ軍人達の書簡集、イギリスの将軍の書簡集などを国内で入手。

次に、入手困難であったホーソンの初期の作品や、ホーソンが編者として編纂した雑誌、北アメリカ大陸に於ける英仏植民地間抗争や、ヨーロッパにおける抗争に関する歴史書を購入し、目を通した。ただし、あくまでホーソンの作品や、彼が目にしたであろう書物を中心にし、現在の歴史書からの知識を前面に押し出すことはできるだけ避けた。

(3) 図像学的手法の継承：

独立期アメリカの精神と文化の表象を扱うにあたり、これまで行ってきた図像学的研究方法を継承した。入手しにくい文献や図像を国内で集めるだけでなく、カナダやメイン州の古戦場に出向き、現地の具体的地勢や記念碑を確認してテキスト読解の補助とした。その際、各地の歴史協会、図書館、博物館のお世話になった。

4. 研究成果

(1) 図像を補助線として、これまで殆ど取り上げられなかった、ホーソンのスケッチともエッセイとも短篇とも定義の難しい小品のテキスト分析をすすめた。独立期アメリカの表象と言えど何をおいてもジョージ・ワシントンであるところから、ワシントンから始めた。このテーマでの研究成果として、アメリカ学会の依頼による「ホーソンの<ジョージ・ワシントン>——歴史と詩的想像力の交錯」『アメリカ研究』43号(2009)がある。

従来集中的に論じられた批評がほとんど見当たらない、ホーソンのジョージ・ワシントン像に関して、スケッチとも短篇ともつかぬ、批評の対象になりにくかった「自筆書簡集」を中心に、ホーソン作品のテキストに散見されるジョージ・ワシントンへの言及を拾い上げた。ホーソンが賞讃した歴史家ジェアード・スパークスの編になる『ワシントン著作集』、同じくスパークスの『ワシントンの生涯』とのインターテクスチュアルな読みを試みた。さらに19世紀前半フランスの軍人詩人アルフレッド・ヴィニーの『軍隊の服従と偉大』が、ナポレオンを批判するのと対照的に、軍人の鑑と讃えるジョージ・ワシントンと、ネルソンのあとをついで提督となった英国軍人コリングウッドに言及し、ホーソンが読んでいた『コリングウッド書簡

集』と比較検討した。私心を捨てた両者に共通する「沈黙の深い悲哀」を、ホーソンが高貴な人格の表象とみなしているのではないか。さらにホーソンが読んでいた19世紀前半の芸術評論家ウィリアム・ダンラップの『アメリカ芸術発展史』に描かれるワシントン像を図像的考察の補助線とし、ワシントンのたっぷりしたマントを、全てを包含する「高貴なメランコリー」の表象と読みとったのではないかと結論した。ホーソンの想像力の根底を脈々と流れるロバート・バートンの『憂鬱の解剖』への視座は、研究者としての道を歩み始めた時から申請者が一貫して主張してきたことであるが、ここにもそれは継承された。

(2) またホーソンの歴史的公的主题と詩的想像力の関わりを、これまで殆ど読まれていなかった「ある鐘の伝記」に、図像を補助線として探った。このテーマにおけるそもそもの構想は、2006年度日本アメリカ文学会関西支部大会フォーラム「起源の感覚とアメリカ文学」における司会・講師として発表した「ホーソンの起源の感覚——”A Bell’s Biography”」にある。このフォーラムを更に充実・発展させて共編著『独立の時代——アメリカ古典文学は語る』（世界思想社2009）に結実させた。その中の申請者の論文は「ある『鐘の伝記』を読む——ホーソンにおける歴史と詩学の交錯」である。

「ある鐘の伝記」は広い意味でのアメリカ独立戦争と考えられる、北アメリカにおける英仏植民地境界でのピューリタンとカトリックとの戦いに材を得ている。実在のフランス人、イエズス会のラール神父の鐘をモデルにした「鐘」を主人公に、語り手が「鐘」の出自・来歴を語る短いスケッチなのである。この「鐘」は多くの革命をくぐり抜けて来た「受け身の英雄」として、アメリカの独立を言祝ぎ、アメリカ民主主義の極めて高いところに位置を占める、アメリカ民主主義の表象となっている。カナダへのフランスの入植から始まり、フレンチ・インディアン戦争、ケベックの降伏、独立宣言、ワシントン大統領就任祝賀、ラファイエット表敬訪問など、アメリカの独立に関わる歴史上の戦争や出来事といった公的主题がカタログ手法で語られる。

このような文脈を与えられた我々は英雄の登場する叙事詩を連想し、アメリカ民主主義についての高らかな勝利の宣言を期待する。しかし、それにしては語り手の口調は奇妙である。アメリカ民主主義に対するマイナスの価値判断を響かせるからである。「鐘の伝記」は「伝記」と銘打つだけに史実に忠実な記述を期待させる。しかし語り手の語る歴史らしきものの断片と、このスケッチの典拠と思われる、ホーソンが熟知していた史料

の内容とは、著しく異なる。事実の異化、曖昧化、匿名化、視点ずらしが行われるのである。いったいこのスケッチそのもの意図はどこにあるのだろうか。

このように不可解なスケッチを読み解くために、まず、ホーソンのスケッチ観を『大理石の牧神』から引き出す。そこから、「鐘の伝記」は、最も強い靈感によって溢れ出した構想の「神聖の発露」として、また、「靈感の純粹な光」を内在させた神聖な想像力の作用する芸術作品として読まれるべきもの、「迅速な荒っぽさ」を特徴とし、「見る者の想像力を作動させる」〈スケッチ〉として読まれるべきものという、ホーソンの伝言が読みとれるであろう。

では、この作品の「神聖の発露」とは何であったか。ホーソンは、人間とは戦争を免れ得ない本性の持ち主ゆえ、〈この世の時〉において戦争が皆無になることはないと考えている。「鐘」の役目は、あくまで〈この世の時を告げる〉ことにあるので、〈永遠の時〉の問題を伝えることは出来ない。〈永遠の時〉の問題は、鐘のこの世の聲が沈黙し、鐘の霊の聲がこの世とあの世の橋渡しをするとき発露する。すなわち「一人きりで想像力を巡らせているとき」に、「人間の光輝ある運命」である真の民主主義は、永遠の時において「真実の唯一の作り主」たる「神」によって実現されると示唆する。「鐘の伝記」は、過去と未来を包括する超越的な眼差しによって、ホーソンの神聖な想念の萌芽を提示するスケッチなのである。

(3) 2008年度関西大学英文学会で企画・実行したシンポジウム「英米文学と戦争」を更に発展させた編著『英米文学と戦争の断層』（関西大学出版部 2011）を企画・出版し、「ホーソンと追憶のなかのウルフ」を執筆した。ここでも歴史上の公的主题とホーソンの詩的想像力の交錯を、図像の助けを借りながら論じた。なお、その前段階として、2008年度日本ヴィクトリア朝文化研究学会全国大会での特別研究発表「ホーソンの〈みた〉二つのイングランド——『英国ノートを中心に』」がある。

北アメリカのフランス植民地ニュー・フランス（カナダ）における英仏戦争（フレンチ・アンド・インディアン戦争）は、イギリスを勝利に導き、フランスを北アメリカから撤退させた、広い意味での独立戦争の始まりとして重要な戦いであった。にもかかわらず、フランスの英雄モンカルムを敗北に追い込んだイギリスの国民的英雄であるはずのイギリス軍人ジェイムズ・ウルフは、アメリカ人からもイギリス人からも忘れ去られた存在となっている。しかしホーソンはそのウルフに注目し、彼を高潔な軍人として高く買い、作品のあちこちに登場させている。そこでホ

ーソンがウルフを重要視した理由を探るべく、ウルフと同時代の英国軍人ピーター・ウオレンや国民的英雄として崇められていたネルソン提督、ジョージ・ワシントンに関するホーソンの記述を中心に比較し、ホーソンの軍人観、戦争観を洗いだした。特に、申請者の興味を引いたのは、19世紀半ばのイギリス人にとって、それがあれば「シェイクスピアもミルトンもいない」、と言うほどの人気を博したネルソン提督を、ホーソンが徹底的に嫌った理由を考えると、彼の軍人観が明確になる。

考察の補助として、エイブラハム高原のウルフの記念碑、ウェストミンスター寺院における軍人達の記念碑、ネルソンの二つのコートなどを、カナダ、イギリス、アメリカなど現地で検分・調査したうえで使用した。

以上のように、戦争という歴史的な公的主题に作家の詩的想像力が混ぜ合わされたスケッチという不思議なジャンルの特徴を、図像学的方法を継承しながらトランス・アトランティックな視点から論じるという当初の目的を、一応達成できたと思う。

なお、ホーソン作品におけるアメリカ独立期を研究する内に、アメリカ国家独立の根底にカトリックとピューリタニズムの対立が深く根を下ろしていることを再認識し、再び初期植民地時代に改めて視点をシフトせざるを得なかった。「ホーソンとカトリック」、「『緋文字』とカトリック」などの研究成果はそこから出ている。この問題は今後の研究に繋げるつもりである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 入子文子、「ポパイの瘤を解剖する」、『フォークナー』(フォークナー協会)、査読有、Vol. 14、2012、pp.14-23.
- ② 入子文子、「ホーソンとカトリック」、『関西大学文学論集』、査読無、Vol.61、No.4、2012、pp.51-65、
- ③ 入子文子、「ホーソンの<ジョージ・ワシントン>」、『アメリカ研究』(アメリカ学会)、査読有、Vol. 43、2009、pp. 1-21、

[学会発表] (計5件)

- ① 入子文子、「ホーソンとアメリカの文化と歴史」、日本大学文学部大学院、特別講義、2012年1月18-19日、日本大学
- ② 入子文子、「『緋文字』とカトリック」、関西シェイクスピア研究会、2011年6月26日、奈良女子大学
- ③ 入子文子、「*The House of the Seven Gables*を読む」、日本ナサニエル・ホー

ソン協会全国大会ワークショップ、司会、2010年5月28日、関西学院大学

- ④ 入子文子、「ホーソンの戦争観」、関西大学英文学会シンポジウム「英米文学と戦争」司会・講師、2008年12月14日、関西大学
- ⑤ 入子文子、「ホーソンの<みた>二つのイングランド——『英国ノート』を中心に」、日本ヴィクトリア朝文化研究学会全国大会、特別研究発表、2008年11月15日、関西大学

[図書] (計4件)

- ① 入子文子、関西大学出版部、『メランコリーの垂線——ホーソンとメルヴィル』、2012、388
- ② 入子文子、関西大学出版部、「ホーソンと追憶のなかのウルフ——『英国ノート』を通して」、入子文子編著、『英米文学と戦争の断層』、2011、298、pp.73-111、
- ③ 入子文子、世界思想社、『ある鐘の伝記を読む』、入子文子共編著、『独立の時代——アメリカ古典文学は語る』、2009、237、pp.111-48
- ④ 入子文子、英宝社、「ホーソンの<みた>二つのイングランド——鷲をめぐる瞑想」、山下昇編著『メディアと文学が表象するアメリカ』、2009、pp.29-55

6. 研究組織

(1) 研究代表者

入子 文子 (IRIKO FUMIKO)
関西大学・文学部・教授
研究者番号：80151695

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：